

東京学芸大 中橋 美智子 ○鶴 澤 裕
 船舶織装品研 村山 雅己

【目的】 キリスト教三大宗派の一つである東方正教会の典礼で現在聖職者が実際に着装している衣服＝祭服は独特な形態をなしており機能的な意味はなく、総て宗教上の意味がつけられている。またパーツは約30点ほど挙げられ、着装の特色としては四つの主な階級（主教職・司祭職・輔祭職・教衆者）に分類され、下位から上位の階級の順で重ね着の状態をなしている。祭服の起源はキリストが存在していたとされる紀元40年頃から始まり、ビザンティン帝国の時代に栄えたとされる。この祭服について、それぞれのパーツの形態とその意味を調査し、併せて歴史的な着装起源についても考察を試みた。

【方法】 日本・ギリシャ・ロシアでの実態を把握し、イコン（東方正教会における宗教画）に描かれている聖人の祭服により歴史的考察を行うとともに、聖人伝・聖書なども資料として調査を行った。

【結果】 歴史的な考察を行ったものの一つとしてサッコス（主教祭服）のパーツを挙げてみると、イコンの年代などから推察し、15・16世紀には存在していたことが確定できた。また、着装起源は東ローマ帝国初期の4世紀頃ということが推定される。

（図の中央はサッコスで両側はフェロンを着装）

